

フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」について

都築茉莉（大阪大学）

フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」（以下、本図）は、垂髪とし、袍と袈裟を着け、柄香炉をとる童子形の太子を中心に、左に天蓋を太子にさしかける童子、右に経巻を捧持し、振り返って太子を仰ぎ見る童子を描く。各像とも右斜めを向いている。こうした図様の太子像は、先行研究において太子が自身の廟嶺へ向かう姿（「廟嶺太子」）とされてきた。ただし、同図様の作例中で最も古様な作風を示す本図については必ずしも十分な研究がない。そこで本発表では、改めて本図の図様の特徴、その成立背景や制作年代について私見を述べたい。

本図の画讃には『四天王寺御手印縁起』の一節を引くことが指摘されている。これに加え、箱書きに四天王寺の衆徒の名が見えることから、本図が四天王寺において制作されたとみられることをまず確認する。

次に、本図の特徴的な図様について検討する。第一に、侍者が持つ経巻の容器については、法華経の容器との共通が認められ、かつ一巻本であることから太子所縁の「細字法華経」である可能性を指摘する。第二に、太子の袍の裾が長く伸びる点について、当時盛んだった如法経十種供養に参列する童子の服制を反映していること、さらに太子の長い垂髪については神像との関連が認められることに着目する。そして、以上の図様の特徴と讃文の内容とを踏まえ、本図が四天王寺で新たに太子の真容として考案された図様であったとの結論を導き出す。

続いて本図様の成立背景について、四天王寺別当を務めた天台座主慈円（1155～1225）が関与した可能性を提示する。慈円の事跡をたどると、前述の十種供養に参列し、四天王寺においても同供養を挙げていたことが知られ、宝蔵より「細字法華経」が発見されたのが彼の別当在任期にあたるからである。ただし、本図の制作年代については、太子の相貌を法隆寺伝来の作例と比較すると「聖徳太子勝鬘経講讃図」（文暦二年〈1235〉）や「五尊像」（暦仁元年〈1238〉頃）と近似し、ことに「五尊像」が太子の髪を長い垂髪で表す早期の作例であることも勘案すると、鎌倉時代前期（1230～40年代頃）とみるのが妥当である。したがって、本図様の成立に慈円の関与を想定するならば、本図自体は原本成立後間もなくの写しとみるのが妥当であろう。

最後に、四天王寺で成立した本図様が、後に廟嶺と結びついた要因の考察を試みる。慈円は、自ら太子廟を参詣した際、四天王寺において法華経の書写・供養を行っており、これ以降太子廟への参詣が盛んとなった。こうした動静を受けて、太子信仰の中心寺院として四天王寺と対抗関係にあった法隆寺においても、太子関連の史料や絵画に廟嶺に関する記述やモチーフが多数登場し、廟嶺信仰が強調されるようになる。後の同図様作例に廟嶺に関する画讃が引用される背景には、慈円を中心とする四天王寺における廟嶺への関心の高まりと、それに伴い隆盛した法隆寺の廟嶺信仰の影響があったと考える。